



慶應義塾大学ビジネス・スクール

夜驚を訴えるエリート後継者

主訴：最近不安な夢ばかり見る。夢で覚醒して、その後なかなか寝つかれない。覚醒した時にはパジャマが胸元からびっしょりぬれるほどの寝汗をかいっている。妻には、寝ているとき寝言が多く、時折叫んだりしていると言われる。

来談者：38歳の男性。妻と子ども1人（6歳の女兒）の3人家族。地域密着型公共事業に製品を提供している従業員600人のメーカーの取締役兼生産管理部長。

会社の状況：来談者の祖父が戦前に事業を興し、戦前・戦中を通じて地方自治体、軍隊、公共事業体向けに製品を作ってきた。製品は技術革新の余地がほとんどないものであり、一定の期間が経つと寿命が来るため交換しなければならない性質を持っている。公共事業体や自治体からの定期的な需要があるため、また競合他社がないため経営は安定している。祖父はもともとエンジニアでその技術を活かして会社を設立。豊富な官需を背景に、既に戦前にはその県の需要をほとんどカバーする企業体に成長させていた。戦後、駐留軍の指導があり、会社が2つに分割され県北部を長男が、県南部を祖父の内縁の妻の子ども（来談者の父親）が引き継ぐことになった。前者が「本家」、後者が「分家」のような位置関係にある。会社が分割されたとき、地元の公共事業体と銀行の資本が入り、株式の保有率はこの会社の一族が50%、公共事業体が25%、銀行が25%となっている。公共事業体と銀行から「天下り」で、常に10人ほどの役員や部長が送り込まれている。

父親：戦後の混乱期に祖父の会社を継いだこと、「本家」とライバル関係にあったこと、公共事業体や銀行との関係維持に腐心した経験からか、慎重で注意深く、かつ巧みな人心掌握の術を心得た経営者である。「一見温和で人当たりがよいが、心の中は冷徹な血がある」とのこと。

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの渡辺直登教授が作成した。ケースに記載されている個人情報については、本人および関係者の尊厳と秘密を保護するため、当事者の了解のもと事実から逸脱しない程度に偽装されている。

母親：専業主婦。結婚前は会社勤めをしていたが、結婚を機に家庭に入った。優しい、愛情豊かで、子どもを溺愛するタイプ。

妻：33歳。見合い結婚。製品を納めている公共事業体の実力者のお嬢さんで、10年前、周囲（特に父親どうし）に強く勧められて結婚。来談者曰く「特に好きな人ではなかった」。

5

子ども：幼稚園年長組。女児。

本人：「帝王学」を受けて育てられる。私立の小、中、高校を経て、地元のA大学の工学部に入学。その後東京の国立B大学の大学院に進学。博士課程を修了して、地元の私立C工業大学の講師に。30歳で講師を辞め、アメリカD大学大学院でMBAを取得。33歳から現在の会社に勤め始め、4ヶ月前に取締役に就任。趣味は鉱物採集。

10

事件：父親が半年前に体調を崩し入院。内臓に重篤な病理があることが判明。本人もうすうす気づいており、先の取締役会議で来談者を取締役に推举した。

15

【夢の内容1】夜明け前、ひとり浜辺に立ち水平線を眺めている。だんだん水平線が明るくなってきた。いよいよ夜明けかと彼方を見つめていると、太陽が厳かに上がってきた。しかし、その太陽は黒い太陽であった。

20

【夢の内容2】薄暗い夕方、大きな底が見えない穴のふちに立っている。戦争中の米軍の爆撃で出来た穴らしい。周囲にみすぼらしい着物を着た人がいて穴の中をのぞいている。自分も覗き込んだ瞬間足元の土が崩れ、穴の中に落ちてゆく。

不許複製

慶應義塾大学ビジネス・スクール

Contents Works Inc.